

冬の谷間の記録

(2)



鈴木 与一

冬の谷間の記録（三）

鈴木 与一

第三章

暁闇深く

三頁～一〇三頁

第四章

光よ心よ

一〇四頁～二〇八頁

## 第三章

暁闇深く

底冷えのする寒い日だった。風が強く、千切れた雲が飛んでゆく。自治会室のガラス戸が時々大きな音をたて、どこからか隙間風が吹きこんでくる。電線に引っかかった紙きれが千切れんばかりにはためき、切なげに鳴っている。

長方形の大きなテーブルが二つ、ロッカーと整理棚——その何れもがビラや模造紙や更紙などの束で埋まり、謄写印刷機やガリ版、墨汁などが適当に置かれている。床板は歩きたびに底が抜けるかと気になるような、めしめしという音をあげるのだが、殆んど掃除をしないために様々な紙片が飛び散り、かなりの厚さに達していた。壁は烈しい語調の色とりどりのポスターや自治会旗で埋めつくされ、日付入りの黒板に、乱暴な文字で行事予定が記入されている。折畳式の椅子があちこちに置かれ、乱雑で埃っぽく汚れ、そのひどさは同等の場所を探すに苦しむほどであった。しかしプレハブ建てのこの部屋だけは、守衛も補導課の職員も立入り不可能な、賀来たち自治会関係者の自由な聖域であった。自治会役員は党組織のメンバーでほぼ独占していたから、いわば組織の公然活動の牙城といえた。

二日前の学校は冬休みに入っており、学内は閑散としている。時折砂埃を舞いあげて風の吹きすぎる校庭には、人影ひとつ見えない。

建てつけの悪い戸を荒々しく開けて、風とともに古川が飛びこんで来た。彼は蒼白な顔面をひきつらせて棒立ちになったままだである。普段でさえ蒼白い顔をしているだけに、一目見てただ事でないのを誰もが感じた。

「どうしたんだ？」賀来が訊くのと、古川が叫ぶように云うのと殆んど同時であった。

「汚ねえぞ、処分だ」

一瞬、部屋の中が静まり返った。岩田や賀来をはじめ、七・八名いた全員が黙って古川を見つめたままだである。

「いいから、そこへ坐って詳しく説明してくれ。処分は当然出るものと考えていたんだから……」今更慌ても仕方ないことだ、と云うのを口の中に呑みこみ、中指で眼鏡を押しあげると、もの静かに岩田は云った。古川はやや落着いた口調で、通りがかりに掲示板を見て、岩田・賀来・宇野・清田・松井・古

川・柳の七名を、学内共通細則違反により無期停学とする旨の掲示を知って驚いたのだと云うと、考えこむ風に下を向いた。

とうとう来たか、と賀来は胸のうちに呟く。無期停学……、無期停学……、呪文のように胸のうちに呟いてみる。うそ寒い風が背中を吹き抜け、暗鬱な思いが拭っても拭っても彼の心に重くふりかかってくるのをどうすることも出来なかった。そしてそれら不安や暗い思いを押しつける如く賀来は云った。

「不当処分に対する反対運動をどう進めるか、早急に自治会代表者会議を開いて、対策を出さねば……」

「賛成だな」即座に岩田は応じてから、

「場所、時間、メンバーへの連絡方法など、ここで詳しく決めよう」

宇野たちは無言のまま頷いた。予想していたとはいえ、現実に動かし難い事実となつて目の前に突きつけられて、彼等もそれぞれの思いを噛みしめている風であつた。切迫した緊張感が、うらさびれた、乱雑な自治会室に充満してゆく。

「くそっ！」としほり出すように誰かが云う。

「学生が休みの時期を狙うなんて卑劣だ」

「抗議ストの打ちようもないのを見越しているのさ」

ほとぼしするように、憤怒の言葉がつきつきにあがった。あくる日の午後一時、自治会室に集合することにし、活動家への連絡運動を細かく決めた。折悪しく自治会では帰郷運動に力をいれ、かなりの活動家が帰省していた。キャップの岩田と、賀来・宇野の三人は最後まで残り、長い見通しのもと、綿密な斗いのスケジュール作りに歿頭した。細かい打合せもあり、かなりの時間を費やしたのである。

打合せを終えて別れを告げたころは、すでに夕闇が音もなく厚みを増しつつあった。冬至に近い師走の、早い夜の訪れを告げている。昼間の強い風は治まって来たが、雲が次第に厚みを増し、月もなく星もなく、人影ひとつない旧館のあたりは廃墟そのものであった。賀来はジャンパーの襟をたて、ポケットに両手を入れたまま、文学部掲示板の前に立った。アジビラや糾弾・呼びかけの



類いは、冬休みであるため一枚も見当らない。それだけに賀来と宇野の無期停学を告げる学校側の告示は、ひときわ目立った。右の者、学内共通細則第二十二條違反により無期停学に処する……、遠い外燈の淡い光に照らされたその文字を、賀来は繰り返し目読する。その彼の記憶の底から、処分に至る斗いの数々が、ゆらゆらと立ちのぼって来るのであった……。

——正門を入れて本館や新館に向う舗装道路の右側は、ぼうぼうと雑草が生い繁っている。運動場ほどの広さをもったその空地の右側には、赤錆び、折れ曲った鉄骨が折り重なって自治会室や各クラブの雑居するプレハブ住宅まで続き、空襲による戦災のもの凄さを物語っている。本館にいたる道路の両側や広々としたグラウンドにも、かなりの雑草がはびこっている。

「凄いな、この草は……」と古川が周囲を見廻す。

「そうか、そういう方法があったか」と賀来は云った。

「そういう方法？」

「うむ。学校側に申しこんで、自治会で草刈りアルバイトを募集したらどう

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。